

コーチングにおける指導者の転機分析力に関する現象学的考察

小 倉 晃 布

Phenomenological analysis of the coaches' ability to grasp the "*Krisen*" of athletes' kinesthetic consciousness

Akinobu Ogura

Abstract

The purpose of this study is to clarify an important ability for coaches from the viewpoint of phenomenology. In the field of coaching, it is essential for a coach to enhance the athletes' skills and performance. For this, the coach needs to understand the differences in the athletes' "kinesthetic consciousness" accurately. This "kinesthetic consciousness" refers to "*Kinästhesie*". a concept of Husserl's phenomenology (Kaneko, 2002).

This study reveals the kind of abilities a coach needs to understand the differences [*Krisen*] in the athletes' kinesthetic consciousness accurately based on the theory of Husserl's phenomenology.

In this study, I considered a previous coaching case of a junior gymnast and applied the "phenomenological reflection" method to it. Phenomenological reflection differs from normal reflection. I reflected not only upon my coaching process, but also upon the significance of my awareness during coaching. I analyzed my coaching process in detail. Thereafter, I focused on the scene to understand the differences [*Krisen*] in the gymnast's kinesthetic consciousness and reinterpreted the effect of my coaching from the viewpoint of phenomenology.

Analysis of my coaching process revealed the following:

- 1) My "awareness" was a prerequisite for understanding the differences [*Krisen*] in kinesthetic consciousness.
- 2) This awareness was generated by missing of "Protention" [unconsciousness prediction in phenomenology].
- 3) The coach's interest in a difference in kinesthetic consciousness is an important factor that generates this awareness.
- 4) To grasp the differences [*Krisen*] in kinesthetic consciousness accurately, it is necessary for the coach to observe with understanding the inside of the gymnast.

In conclusion, this study researches the ability of a coach to understand the differences [*Krisen*] in athletes' kinesthetic consciousness accurately. To date, few studies have researched such abilities. Therefore, the results of this study may be useful and informative toward building a coaching theory.

key words: Coaches' ability to grasp the "*Krisen*" of kinesthetic consciousness, Husserl's Phenomenology, Awareness, knowing how to coach, Kaneko's movement theory

北海道教育大学岩見沢校
〒068-0835 北海道岩見沢市緑が丘2丁目34

Hokkaido University of Education Iwamizawa
2-34 Midorigaoka, Iwamizawa, Hokkaido. 068-0835

著者連絡先 小倉 晃布
ogura.akinobu@i.hokkyodai.ac.jp

I. はじめに

コーチング実践の現場において、指導者が選手の動き (Bewegungsweise) の変化を的確に把握することはきわめて重要な活動である。選手の動きの変化をとらえる場合、たとえば、ある運動の達成回数やその割合、要した時間などの量的指標を基準にする方法や、あるいは測定機器を用いて身体部位の角度変化や位置移動の変位・速度を計測し、データとして算出する方法などが一般的である。これらの方法では、動きがどのように変わったのかを数値上の変化として把握することが可能となり、指導者や選手に客観的情報を提供することができる。なおかつ、コーチング研究に携わる第三者の研究者にもその過程や根拠を明示できるという点で、コーチングの実践ならびにコーチング理論の構築に有用な情報を提供してきたといえるだろう。

しかし、コーチング実践の現場は「数多くの事象が複雑に錯綜し合って表出するもの」(図子, 2017, p.134)であり、量的指標や外部視点からの測定データは、日々刻々と変化する選手の動きの一側面を取り出したものに過ぎない。村木 (2007, p.2) のことばを借りれば、それらは「複雑な運動の比較的計測し易い内容に限られると共に、観測者の意図と観測方法に規定されたもの」であることから、観測結果のみを取り出して検討するだけでは、選手の動きを十全に把握することはできないと考えられる。選手の動きの変化を的確に掴むためには、従来の科学的手法によって得られるデータのみならず、その動きに隠されている〈何を意識しているのか〉や〈どのように動こうとしているのか〉といった〈動感志向性〉^(注1) (金子, 2005a, 2005b, 2007) を分析するという視点が不可欠になる。このような視点が欠落していた場合、たとえば、ピッチ上のサッカー選手が戦術的意図を理解して特定の地点に移動したのか、それとも何の意図も持たずに偶然にその場所へ移動したのかは判別できない。サッカー指導者が、選手のそのような志向性 (Intentionalität) (木田, 2000, p.29) を分析することなしにコーチングを行うことはあり得ないし、指導者がそのような違いを区別できないようであれば効果的なコーチングは成立しない。

一方、指導現場では、〈あの選手はこの部分を意識できるようになった〉などのように、選手の動感志向性の変化を「転機」(ヴァイツゼッカー, 1975, p.273) としての確に感じ取り、それをもとにアドバイスしたり、習熟度を判断して指導内容を変更するといった臨機応変なコーチング活動を展開している指導者も少なくない。選手の動感志向性の変化を〈転機〉としての確に見抜くこと、いわゆる「転機分析」(金子, 2010, pp.8-14) は、あらゆるコーチング活動の起点ないしは分岐点となるべきものであり、創造的なコーチング活動を展開するうえで不可欠な判断基準になると考えられる。ところが、佐

藤 (2018, p.160; p.271) がいうように、転機分析力は「自身の運動経験や指導経験などを土台として自ら高めていく努力が要求される専門能力」であり、誰にも等しく開かれている能力でもなければ、その内実もこれまで十分に明らかにされていない現状にあるという。このような指導者の専門能力は、実践現場の営みによって生み出されてきた「実践知」(會田, 2018, p.41) であり、「研究者が獲得する科学の知とはかなり異なる」(図子, 2017, p.132) ことから、理論知 (科学知) を研究対象とする従来の科学的分析、とりわけ自然科学的分析法では明らかにすることが難しく、その大半が「暗黙知」(ポランニー, 2017, pp.15-53) のレベルにとどまっていることがその要因として挙げられる。

しかし、先述のように指導者の転機分析力はコーチング活動において重要な能力となることが考えられ、それを「暗黙知のレベルにとどまらせておくのではなく、次世代の指導者や選手が活用できるように記述し、それらに通底する原理を発見する取り組み」(會田, 2018, p.51) が重要であろう。そのためには、たとえ個別的な指導事例であっても、あるいは指導選手の競技レベルを問わずとも転機分析に関する事例を積極的に取り上げ、厳密に反省分析を施しながら記述していくことが求められる。新竹・渡辺 (2018, p.2) は「個別指導事例の反省分析を通して得られた記述の成果は、指導実践現場で生じる様々な問題点に気がつくための先行理解を提供し、解決にむけた手段と方策を投企し実行する動機づけを与えることによって実践理論の構築に寄与することができる」と述べ、コーチング実践理論の構築には、まずもって個別指導事例の記述・蓄積が必要になることを指摘している。つまり、実践知の解明は事例の蓄積から始まるのである。

以上の問題意識から、本研究では、筆者が過去に携わっていた体操競技クラブのある選手に対する1年間の指導過程を事例として取り上げ、選手の動感志向性の変化を〈転機〉として感じ取った場面に焦点を当て、その転機分析の過程を、「自然科学や他の学問がいまだ特定できていない経験の発見を行うための哲学の技法」(河本・稲垣, 2017, はじめに) である現象学的立場から考察することを目的とする。このことを通して、筆者の転機分析の内実を事例的に明らかにし、実践知の一つである転機分析力を解明する一助にするとともに、コーチング研究の発展に寄与しようとするものである。

II. 方 法

1. 記述的立場と記述のねらい

上述したように、本研究で明らかにしようとする転機分析力は実践知の一種であり、分析対象となるのは、主に筆者自身の志向的体験 (谷, 2018, p.61) である。このような人間の「体験」の世界を理解するためには、実

験、観察、およびそれらの結果を統計的に処理したものをエヴィデンスとする自然科学とは別種のエヴィデンスが必要となる（小林・西，2015，プロローグ）。

哲学者である西（同書，pp.119-131）は、現象学の鼻祖フッサールのエヴィデンス（明証性）の考え方を、保育、介護、看護、医療、教育、心理臨床のようなく人を支援する実践を支える人間科学に拡張することを試み、人間科学におけるエヴィデンスを＜反省的エヴィデンス＞と呼んだ。それは、＜自分の意識体験を反省してみると、それがかくかくしかじかのあり方をしていることが直接に確かめられる＞といった体験反省のもつ不可疑性を意味する。

本研究では、この反省的エヴィデンスにもとづき、鯨岡（2006）の主張するエピソード記述の方法^{（注2）}を用いて、筆者の指導事例を記述する。ここでいう記述とは「なにかを模写することでも記録することでもなく、そのなかではじめて『事象』があるプロフィールをもって現われてくることになる場を拓くということ」（鷺田，1997，p.4）である。つまり、本研究では、過去の指導事例において筆者が選手の動感志向性の変化を＜転機＞として感じ取った場面をエピソードとして呈示し、当時の情況や筆者の興味、関心、理論等も含めて記述することを通して、なぜそれが転機として感じ取られたのかという筆者の「暗黙の理論」（鯨岡，2000，pp.162-165）を明らかにすることが目指される。

2. 分析方法

本研究では、筆者の志向的体験を分析する方法として、現象学的反省分析を用いる。ここでいう＜現象学的反省＞とは、われわれが日常生活で用いる「今日の一日を反省する」といった一般的意味のふり返り活動ではなく、「生活世界と生活世界的対象が主観にどのように与えられているかというその与えられ方へ首尾一貫した反省をくわえる態度」（フッサール，2016，p.257）としての「超越論的な反省」（フッサール，2001，p.69）を意味する。そして、その反省の課題は、「もとの体験を反復することではなく、それを観察し、そのうちに見出されるものを解明すること」（同書，p.71）であり、反省された内容がある理論的関心のもとに観察し、再解釈することを通して、「新しい志向的体験をもたらす、それによって『以前の体験へ遡って関係する』という志向的な特性において、ほかでもないまさにこの以前の体験が意識され、場合によっては、明証的に意識される」（同書，p.71）ことになる。

つまり、本研究では、過去の指導事例をふり返って、それが転機であると感じられたという一般的反省内容を時系列的に分析するのではなく、＜なぜそれが筆者にとって転機として感じ取られたのか＞、＜それはどのように成り立っていたのか＞という理論的関心のもと、「各自に直接与えられている感じや考えの仕組みを、各自の

内面にどのように与えられているかを、はっきりさせようとする」（山口，2009，p.42）ことを目的として、筆者の意識体験内容を現象学的に反省分析する。そうすることによって、他の読み手も納得できるような了解可能性をもつ転機分析力の＜本質＞に迫ることができると考えられるからである。

なお、筆者の指導過程の反省分析にあたっては、筆者が1年間にわたって収集した選手の練習映像と、筆者が毎回の指導後に記録した指導ノートを考察資料として用いた。これらは、筆者が当時の指導実践の様相を「意識的に再び思い出す＜再想起＞（Wiedererinnerung）」（木田ほか編，1994，p.285）すること、そして、当時の志向的体験を現在に引き戻しながらありありと「追体験（Nacherleben）」（木田ほか編，1994，p.342）することに役立てられた。

3. 対象事例の選定理由

今回取り上げる事例は、過去に筆者が指導に携わっていたX県の体操クラブ（以下、A体操クラブ）における男子ジュニア選手の円馬^{（注3）}という種目の指導事例である。指導期間は2009年11月から2010年10月に開催された＜X県ジュニア体操育成大会＞（以下、競技会とする）までの約1年間であり、この事例は、筆者のこれまでの指導経験の中で、選手の転機発生を＜驚き＞として知覚した経験として印象深く残っている。佐藤（2018，p.271）は「実際に指導している中で“驚き”を見つけることから研究は始まる」と述べ、また、それは「『突然上手になって驚いた』といった驚きではなく、日常何気なく見過ごしているできごとの中に重要な意味を見いだすことである」と、コーチング研究の端緒は、普段は見見過されてしまうような指導者の何気ない気づきにあることを指摘している。

また、事例研究としてのエピソード記述の意義を主張する鯨岡は、研究者によって取り上げられたエピソードは、「観察者＝研究者がおのれの理論を語るための『道具』にもなり得る」（鯨岡，2000，p.163）と述べ、研究者自身がもつ暗黙的な理論がエピソードのなかに隠されていることを指摘している。以上のことから、筆者にとって＜転機発生＞を感じ取った経験として印象深いこの事例は、本研究の主題である転機分析力の内実を探るのに適した事例であると考えられる。

4. 倫理的配慮

本研究を進めるにあたって、考察対象者とその保護者、A体操クラブの代表者には研究内容を事前に説明し、研究への協力の承諾を得ており、映像や写真についても研究内容、論文作成、学会誌投稿を目的に使用することの許可を得ている。なお、考察対象者に関しては当時から時間が経過していることもあり、改めて連絡を取り同様の説明を行ったうえで学会誌投稿の許可を得た。

また、本文中の記載に関しては、プライバシー保護の観点から＜A体操クラブ＞や＜X県＞、後述するように＜B体操クラブ＞、＜選手Y＞と表記している。

Ⅲ. 予備考察

1. 旋回の技術構造と指導目標像の設定

本研究の指導対象となる技は、円馬の旋回である。旋回という運動は、図1に示すように体操競技における男子種目・鞍馬の基本技であり、「前の方向を変えないで、両足を水平運動面に回すので、一旋回中に二度、旋回方向に反対のひねりを入れる」（金子，1974，p.323）という構造特性をもち、「正面支持→両足入れ→背面支持→両足抜き→正面支持という経過を辿る循環運動である」（水島，1998，p.40）。

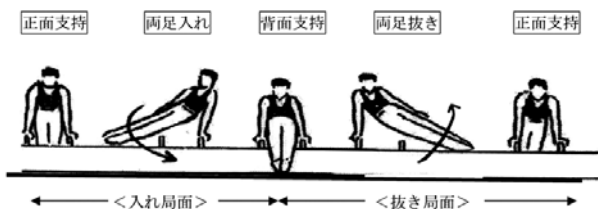


図1 鞍馬運動の旋回の運動経過<左旋回>
(金子，1971より加工して転載)

旋回の理想像としての運動経過は、各時代の技術認識の変遷に伴い著しく変化してきている（太田，1972a，1972b；金子，1974，1976；中村，1997；水島，1998；吉田ほか，2008）。本研究では、旋回に関する技術史的考察の詳細は割愛するが、指導者はその時代における技術認識を踏まえた上で選手の指導目標像を設定することが求められる。ここではとくに、ジュニア期の選手がどのような旋回を志向すべきなのか、その志向対象としての旋回の運動経過について検討する。

以下は、日本体操協会が発行する『男子ジュニア選手のためのトレーニング・マニュアルー種目編ー』（2001，pp.51-54）に記載されているジュニア期の旋回のポイントをまとめたものである。

- ・正面支持から背面支持の＜入れ局面＞では、無理に腰

をかえしたり、足先先行で真横を通過することは避けるべきであり、（左旋回の場合は）左腰からわきを大きく開き、＜入れ局面＞の動作を行う

- ・背面支持では、大きくわきを開いて体線を十分に伸ばし、肩が後ろに倒れないように注意する
- ・背面支持から正面支持の＜抜き局面＞では、＜入れ局面＞と同様に無理に腰をかえすことなく、できるだけ体線を伸ばしたまま自然に腰をかえしていく
- ・正面支持では、次の＜入れ局面＞につながるように、体線を十分に伸ばす。腰・肩の力を抜き、腰を曲げたり、胸をつり上げた状態にならないように注意する

これらのポイントを踏まえた上で、筆者は具体的な指導目標像としての旋回の運動経過を頭の中で潜勢的に構成化することを試みた。また、幸運にも別の体操クラブに過去の競技会で入賞経験のある選手が在籍しており、その選手の旋回を確認したところ、筆者の指導目標像と近似していた。図2はその選手の旋回の運動経過であり、このように姿勢面の乱れ（膝の曲がりや足の開きなど）が見られず、安定したリズムで周回数をまわすことのできる旋回が、ジュニア期の競技会では＜質の高い旋回＞と評価されている。なお、ここでいう質とは、運動質（Bewegungsqualität）（マイネル，1981，p.146）を意味し、姿勢の美しさはもちろんのこと、スピード感や安定感、リズムカルな要素などを含んだ旋回のことである。先述したポイントも含め、筆者はこのような具体的な運動経過を指導目標像として位置づけた。

2. A体操クラブの練習環境

以下は、当時のA体操クラブの練習環境の概要を示したものである。A体操クラブは、目標としていた競技レベルからすると練習時間が十分ではなく、競技会で優秀な成績を収めている同じX県内のB体操クラブと比較すると、厳しい時間的制約を抱えていたと考えられる。本論の考察の範囲に及ぶが、この時間的制約は筆者の指導内容に大きく関わる要因であった。

- ・筆者はA体操クラブで、ジュニア選手育成を目的とした＜中級クラス＞の小学生男子8名を指導していた
- ・この中級クラスでは、競技会の中級カテゴリーに出場し、上位入賞を目標としていた

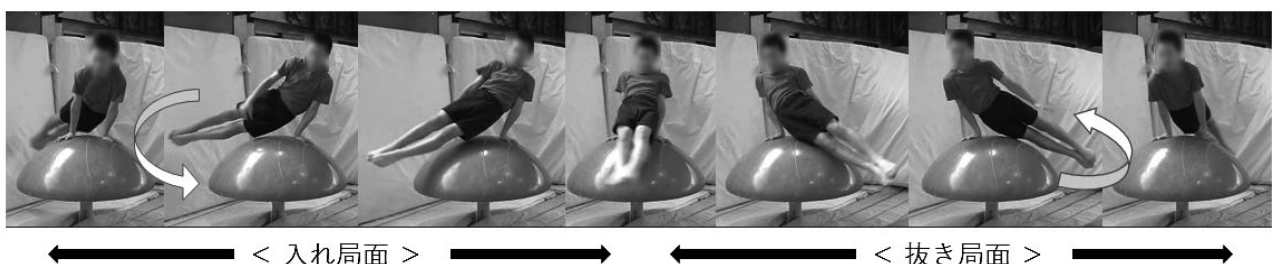


図2 入賞経験選手の旋回の運動経過（指導目標像）

- ・当時の競技会の中級カテゴリーでは、男子はゆか、跳び箱、鉄棒、円馬の4種目の演技が求められ、研究対象の円馬の演技は「旋回を6周実施する」という内容であった
- ・A体操クラブの練習日数は週2日（1日3時間）であるのに対し、B体操クラブの練習日数は週5日（1日5時間）であった

3. 考察対象者のプロフィール

筆者は中級クラス8名全員に指導を行っていたが、A体操クラブは指導体制の変化も多く、ときには別の指導者が中級クラスの指導に関わる期間もあり、筆者が1年間継続して指導することのできた選手は8名中3名のみであった。本研究では、この3名の中の選手Yを考察対象者として取り上げる。

選手Yは当時小学3年生であり、小学1年生のときに別の体操クラブで体操を始め、小学2年生でA体操クラブの育成クラス（初級）に移り、競技会に向けて週2回の練習に通い始めた。既習技として、ゆか運動のロンダート～後転とび（バク転）や前方倒立回転跳び、鉄棒のけ上がりや反動さか上がり（ほん転さか上がり）、跳び箱の前方倒立回転跳びなどを習得していた。円馬に関しては2009年4月に中級クラスに移ったときから練習を開始した。つまり、筆者が指導に関わるまでに約半年間の円馬練習を行っていたことになるが、その期間の指導者からは本格的な旋回指導を受けておらず、まだ円馬の初心者という印象を受ける段階であった。

Ⅳ. 事 例

1. 指導開始当初（2009年11月ごろ）

図3は指導開始当初の選手Yの旋回の運動経過である。当時は、膝の曲がりや足の開きなど姿勢面の乱れが目立っており、一度の試行で連続してまわすことのできる最大周回数は1周であった。

このような旋回を受けて筆者は、まず選手Yに対して周回数を1周に限定し、姿勢面を意識した旋回を練習課題として呈示した。中村・周東（2002, p.24）が指摘するように、旋回のような循環運動は、「1回の試行で1回しか遂行できないような非循環運動（azyklische

Bewegung）に比べていったん身についてしまった欠点や癖が知らぬ間に定着しやすく、修正指導に苦勞するといった事態に陥りやすい」。そのため、筆者の指導現場の時間的制約の問題を踏まえ、このような修正指導に時間を費やすことは避けたいという考えから、まずは姿勢面を意識した旋回を習得させようとした。

しかし、約2週間の練習を観察する中で、選手Yの練習活動が筆者の意図とは異なることに気づいた。選手Yは、筆者が直接指導をしているときは姿勢面を意識した練習を行うが、筆者が円馬のそばから離れると、姿勢面に意識を向けずに2周、3周と周回数の量を多くまわろうとする練習を行っていた。ここで筆者は、強制的にでも姿勢面を意識した旋回に取り組みせようかとも考えたが、当時の選手Yは小学3年生ということもあり、初期のころからあまりに厳しく指導すると今後の指導に良い影響を与えないのではないかと考えたため、ここでは、選手Yにとっても運動結果を共有しやすい「周回数の量」を目標とした指導へ転換した。

2. 周回数の量から姿勢面を意識した指導への移行（2010年1月ごろ～）

周回数の量を目標とした指導を続けていくと、選手Yの旋回は2010年1月ごろには一度の試行で10周をまわることもあり、3周～5周はコンスタントにまわるという定常性を示していた。しかし、引き続き、選手Yの興味は周回数の量に向いており、周回数の量を多くまわろうとするなかで、膝の曲がりや足の開きなど姿勢面の乱れは継続的に見られていた。周回数の量に対する興味は根強く、たとえば2010年3月29日と4月3日の練習後の筆者の指導ノートには、次のような記述が見られる。

今日の選手Yに旋回の目標周回数を尋ねると「5周」と言っていた。そして実際に練習の中で5周をまわることができた選手Yに「最近たくさんまわることができているからキレイな旋回をしてみようか」と言ったが、選手Yは「はい」と言うだけで引き続き周回数の量を多くまわろうとする練習を続けていた。周回数を意識している選手Yに質を意識させるのにはどうすればよいかが最近の指導課題である。（3月29日）

今日も同じように周回数の目標を尋ねると「8周以



図3 選手Yの旋回の運動経過（2009年11月14日）

上」という回答であった。やはり変わらず周回数の量に意識が向いている。しかし、今日の選手Yは調子が悪そうで、目標がなかなか達成できない様子だった。そこで、「今日はあまりたくさんまわれないみたいだから、キレイな旋回をやってみようか」と言うので、選手Yは納得した感じで「はい」と言い、その後は周回数を3周にしてキレイな旋回の練習を続けていた。(4月3日)

このように、周回数の量を目標に練習する中でも、姿勢面に関する意識が選手Yに徐々に形成されているように筆者に感じ取られた日もあった。他にも、あるときは周回数の課題を6周に設定した際、最初の1～2周は旋回中の膝を曲げず足も閉じて姿勢面の意識を保ったまま旋回を遂行しようとしていた。しかし、旋回の途中でバランスの崩れを察知すると、膝を曲げたり足を開いたりしてバランスの崩れを修正し、何とか周回数の課題を達成しようとする動感志向性が感じ取られた(図4)。

上述した指導ノートの記述内容も含め、この期間の練習の様子を観察していた筆者にとって、選手Yの目標意識は、<できるだけ多くの周回数をまわること、あるいは姿勢面が乱れたとしても課題の周回数を達成すること>が第一に優先されており、旋回の姿勢面を意識する動感志向性は二次的な目標になっていることが感じ取られた。

3. 動感志向性の変化と姿勢面に焦点化した指導への転換(2010年4月14日～)

2010年4月14日に選手Yの動感志向性にある変化が見られた。それは、これまでと同様に6周を目標に旋回

を遂行しているなかで、旋回中にバランスの崩れを察知しながらも、途中で止まらず、膝を伸ばし、足を閉じたまま、つまり姿勢面の乱れをほとんど見せずに周回数の課題を達成するという出来事であった。この様子を観察していた筆者は、思わず「あっ」と驚きの声を発したが、それはこれまでとは明らかに異なる旋回の質的な変化が確認されたからであった(図5)。

筆者はこの出来事を契機として、選手Yの目標意識の優先性が周回数の量から旋回の姿勢面に向いたと判断した。換言すれば、<姿勢面が乱れたとしても課題の周回数を達成すること>を優先していた段階から<姿勢面の意識を保ったまま課題の周回数を達成すること>に移行したと判断した。そして、それ以降は、これまでのように膝を曲げたり、足を開いたりして周回数を多くまわろうとする姿が見られたときは、即座にその姿勢面の乱れに関する注意を促し、ときには選手Yが「6周まわります」と設定した目標を、筆者が「3周でいい。その代わりに姿勢を意識してまわりなさい」と課題を変更することもあり、旋回の姿勢面に意識を集中させるという指導内容に大きく転換した。

指導開始当初(2009年11月頃)は、筆者が円馬のそばから離れると姿勢面への意識を疎かにして周回数の量を多くまわろうとしたり、あるいは、旋回の姿勢面に意識を向けるように筆者が促したとしてもその練習に積極的に取り組む様子がなかなか見られなかった。しかし、そのような選手Yの動感志向性の変化を感じられてからは、筆者が目を離しても姿勢面に意識を向けながら旋回を実施しようとする様子や、「姿勢を意識するように」との筆者からの言葉かけに素直に反応する様子が見

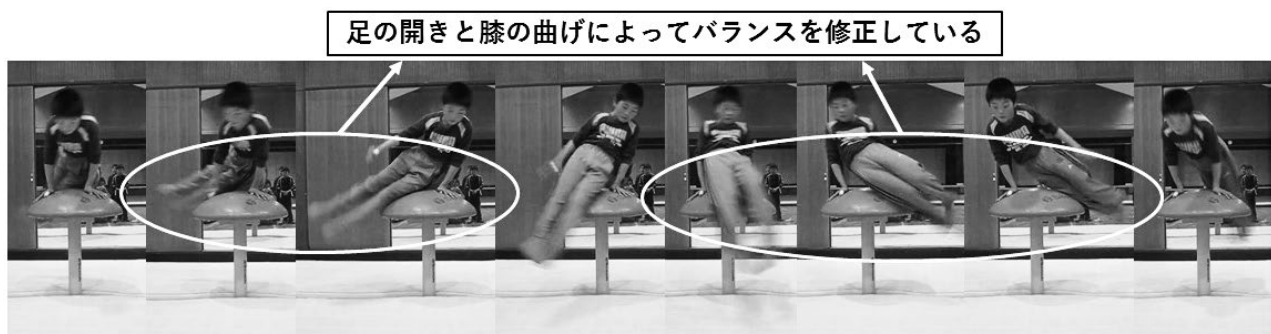


図4 バランスの崩れを察知した際の選手Yの旋回の運動経過(2010年4月3日)

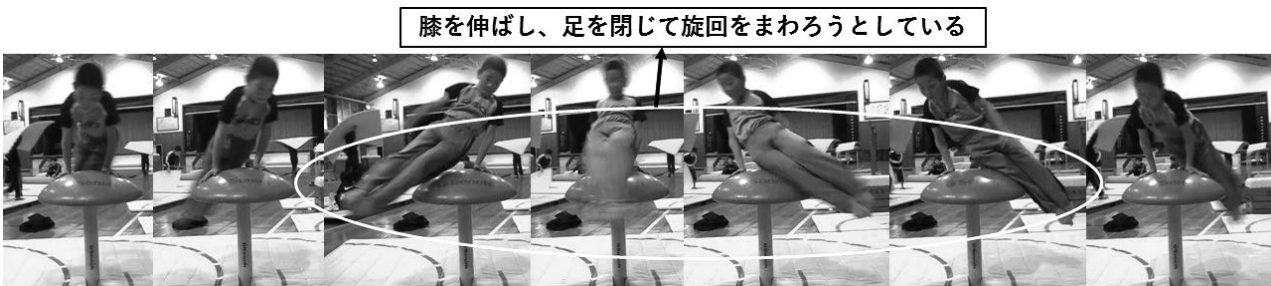


図5 選手Yの旋回に質的な変化が見られたときの運動経過(2010年4月14日)

られ、姿勢面を意識した練習に継続的に取り組むようになった。また、この頃の選手Yの意識の変化を特徴づける発言が、筆者の指導ノートに記述されている。

今日の選手Yに周回数の目標を尋ねると、「キレイに3周まわります」という回答だった。これまでは周回数の量だけを報告してきたが、今日は「キレイに」という言葉が加わった。この前の変化を感じられてから、選手Yの意識は回数よりも「キレイにまわる」に向いていると思われる。また実際の旋回は、途中で少し崩れそうになっても足を曲げずに伸ばしたまままわることができていた。（4月24日）

そして、その後も同様の練習を続けたところ、2010年6月末ごろには姿勢面の乱れがほとんど見られない旋回を安定して実施できるようになった（図6）。

V. 考 察

本研究の目的は、選手の動感志向性の変化を感じ取り、それを＜転機＞として把握した筆者自身の転機分析の内実を事例的に明らかにすることである。今回の事例において、筆者はある時点で選手Yの旋回の質的变化に気づき、それを転機としてとらえ、指導内容を大きく転換した。以下では、その転機分析の過程について、まずは＜選手Yの質的变化に気づくという現象がどのように生じたのか＞をフッサール現象学の観点から考察し、次に、＜なぜそれが筆者にとって転機として感じ取られたのか＞について、フッサール現象学を基に据えた金子の発生運動学^(注4)（金子、2005a, p.83）の観点から考察していく。

1. “気づく”ことの現象学的意味

今回の指導事例において、筆者の転機分析の前提として生じていたのが、選手Yの旋回の質的变化に＜気づく＞という出来事であった。山口（2004, p.102）によれば、この気づくという現象を「『触発する力』の現象として解明したのが、受動的総合の分析を遂行したフッサール」であり、「フッサールは、受動的総合の分析を通して、とりわけ、触発の現象の分析を通して、自我の関心が向けられる以前、つまりそれとして気づく以前に生じている、

気づくように促す感覚内容の意味のまとまりとそのまとまり方を解明」したと説明している。

われわれは日常生活の中で＜人ごみの中に友人がいることに気づいた＞や＜急に画面が暗くなったことに気づいた＞という場合に、＜気づく＞という現象を経て初めてその対象の存在や変化を認識したと考えている。しかし実際は、気づくという能動的な意識が作用する以前に、それに先行した無意識的な意識、言い換えれば、受動的意識が作用していることが、フッサールによって示されたのである。どこからともなく聞こえてくるメロディーが、何かしらの印象的な音が鳴ったことをきっかけとして、自分の知っているメロディーであることに気づくという経験は、そのメロディーに気づくという能動的な作用以前に、聞こえてくるメロディーを無意識的に聞き分けるという受動的意識が作用していたことの好例である。では、今回の事例において選手Yの質的变化に気づいたとき、筆者にはどのような受動的意識が働いていたのだろうか。それを明らかにするためには、フッサールが『内的時間意識の現象学』（2016）で展開している時間意識の構成分析が手がかりとなる。

フッサール（木田、1994, p.169）によれば、われわれが今ここで体験している＜現在＞は、決して物理学的・数学的概念が想定するようなく点＞ではなく、ある幅と広がりをもっており、現在のこの広がりや構成するものがくたった今過ぎ去ったものをなおも現在につなぎとめる働き＞としての＜過去把持＞と、＜今へと来たらんとするものを待ち受ける働き＞としての＜未来予持＞、ならびに現在の中核をなす＜時間の源泉＞としての＜原印象＞という三つの契機であるという。そして、山口（2012, pp.40-41）は、この＜過去把持－原印象－未来予持＞という幅のある＜現在＞の三相構造を踏まえた上で、われわれが＜見る＞ことを通して感じる＜気づき＞について次のように説明している。ちなみに、ここで用いられている＜予期＞という用語は＜未来予持＞と同義であり、下線の強調は筆者によるものである。

いつも見なれたフクロウの置物を手にしなが
ら、ゆっくり回してみたときに、いつもの整った褐色の羽に、子どもが貼り付けたミッキーマウスのシールが見えたとします。「あれっ?」、と違いに気がつくのが普

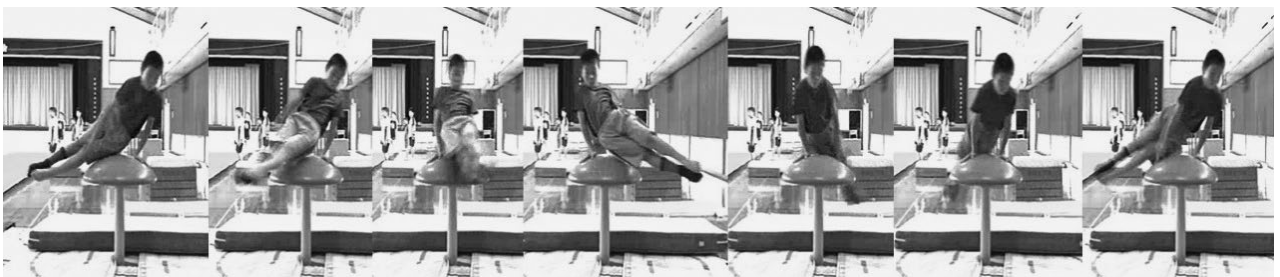


図5 選手Yの旋回の運動経過（2010年6月26日）

通ですが、それはどうしてでしょうか。どうして「あれっ？」と思うのでしょうか。手にしたフクロウに見えない裏側があることは、わかりきっています。そしてそれと同時に、ただの裏側ではなく、自分のよく知っているフクロウの整った褐色の羽であることもわかっています。その褐色の羽は、実際には見えていなくても、また、わざわざ想像しなくても、それとして予測されています。この無自覚的な予測、ないし前もっての期待という意味での予期があるからこそ、その予期に反する意外（思いの外）という気持ち、「あれっ？」をもつわけです。いつもの通りの褐色の羽が見えたのだったら、そのまま自覚せずに見ていて、前もって働いている予期などに気づくことはないでしょう。気づかずに働いている予期が予期された通りに満たされて、外れることがないからです。（山口一郎『現象学ことはじめ』2012, pp.40-41）

ここで説明されているように、われわれが感じる＜気づく＞という現象は、内的時間意識を構成する＜未来予持＞が満たされない、すなわち、＜予期＞が＜外れる＞ことによって生じることが示されている。ここで注意しなければならないのは、この＜予期＞は無自覚的な予測といわれるように、われわれの自我の関与なしに働いていることである。そのような受動的な志向性としての予期の働きがあるからこそ、自我の関与する能動的な気づきという現象が成り立つのである。

今回の事例に置き換えて考えれば、選手Yの旋回を観察しながらも、筆者には無意識的（受動的）な予期が作用していたことになり、その予期が予期された通りに充実されなかったからこそ、予期に反する意外な気持ち、すなわち「あっ」という気づきになったと考えられる。そして、今回、筆者の意識の背景（受動的地平）で予期されていた動きとは、筆者の記憶の中に蓄積されていた選手Yのこれまでの志向形態であった。選手Yの旋回のバランスの崩れを筆者が感じ取った瞬間に、＜いつもの選手Yならここで膝を曲げたり、足を開いたりするはずだ＞という予期が受動的に働いており、その予期に反する動き、つまり、バランスの崩れを察知しても＜膝を伸ばし、足を閉じたまま旋回を遂行する＞という動きが見られたために、選手Yの質的变化に気づいたことになる。この例から導き出されるコーチングへの示唆は、指導者が選手の動きの変化に気づく際には、眼前の選手の動きを観察することと同時に、観察者である指導者の記憶の中に蓄積された、その選手の今までの志向形態や動感志向性が無意識的に重ね合わされているということである。そうでなければ、＜今＞という経験直下の選手の動きの＜変化＞に気づくことはできない。

しかしながら、一方で、このような気づきという現象が受動的地平にある＜予期外れ＞によって生じるのであれば、日常世界に無数に存在する感覚素材に対するあら

ゆる＜予期外れ＞が能動的な気づきとなりうることになる。しかし、現実の世界ではそのようになっていないため、このような気づきが気づきとなりうるための要因は他にもあると考えられる。この要因について検討することが次の課題となる。

2. “気づき”における「触発」と「関心」

日常生活には無数の感覚素材があるなかで、われわれは全ての変化に気づいているわけではない。この＜気づくこと＞と＜気づかれないこと＞の違いについて考察を進めるためには、現象学における＜触発＞と＜関心＞という概念が拠り所となる。

山口（2012, p.81）は、この＜触発＞を「意識活動を担う主体である自分、つまり『自我』に感覚素材が働きかけ、『自我』の関心を引きつけようとする」と定義している。また、フッサール（1997, p.215）によると、この＜触発＞は「意識に即した刺激、意識された対象が自我に働きかけるある特有な動向」であるという。このような感覚素材の働きかけが現象学における＜触発＞を意味するが、この働きかけには、「意味の構造化のされ方のさまざまな程度にしたがって、おのずから強弱が」あり、「自我は、この触発に応ずる場合もあればそうでない場合もある」（木田ほか、1994, p.217）ことから、その程度差によって自我の＜関心＞が引きつけられる（気づく）場合もあれば、そうでない（気づかない）場合もある。つまり、気づくという現象は、感覚素材や刺激からの一方的な働きかけによって成り立つのではなく、山口（2012, p.170）が指摘するように、「どんな感覚素材が、どのように触発してくるのかは、簡単にいえば、そのとき自分がいったいどんな関心をもっているのか、に依ります」というように、自我の＜関心＞が深く関わっているのである。

この＜関心＞について、フッサール（山口、2012, p.171）は、「世界に向かっている生命体（意識生）のもつ広い意味での『関心（動機）』が、触発の力の強さを決める」とし、「その動機のなかでも、普通意識されずに働いていて、触発力を決定する最も深い動機」が「『気分といった深い感情や衝動』である」と述べている。また、山口（2012, p.171）も「動機を背景にもつ関心があってはじめて、見えてくるもの、聞こえてくるものが立ち現れてきています…（中略）…動機づけられた関心があるからこそ、外にあるものが見えたり、聞こえたりしているのです」と、われわれの知覚にはそれぞれの＜動機づけられた関心＞が深く関わっていることを指摘している。

ここで、今回、筆者が選手Yの質的变化に気づいた場面において、そこにはどのような＜動機づけられた関心＞があったのかを考えてみたい。先述したように、筆者の指導現場は時間的制約という問題を抱えていたことから、目標とする競技レベルまで選手Yを指導するためには、＜姿勢面の意識を重視した旋回をできるだけ早く指導し

たい>という筆者の思い（強い関心）があった。しかし、指導当初は、選手Yの興味が旋回の姿勢面ではなく周回数の量に向いていたため、筆者の思惑とは異なる指導をせざるを得なかった。このような背景から、筆者の頭にはつねに<いつ姿勢面を意識した旋回の指導に切り替えることができるか>という切迫した指導課題があり、その理論的関心は<選手Yがどのように旋回を実施しようとしているか>、<選手Yの興味はいつ姿勢面に切り替わるのか>ということに焦点化されていた。

そのような関心をもっていた筆者にとって、4月14日の出来事は、今までと同じ6周という量的結果ではあるが、それを<どのようにやろうとしたのか>という動感的視点から見た場合、バランスの崩れを察知しながらも姿勢面を意識したまま旋回を実施するという志向形態は、選手Yの動感志向性の転機、いわゆる「動感志向的転機」（佐藤, 2014, p.79）を強く感じ取らせるものであったと考えられる。金子（2005b, p.246）は、選手に指導をいつ開始するかを動機を意味づけている志向形態を、端的に<起点形態>と呼び、指導者が選手の動感運動のなかに、この起点を意味づけている志向形態を読み取ることの重要性を指摘している。さらに、その起点形態に気づき、指導の開始時期を選ぶためには、選手の動感形態がどのように動機づけられて発生するのかを指導者は問いかけておかなければならないと、選手の動感発生ないし動感志向性そのものに関心を示しながら運動観察を行うことの重要性に言及している。

この意味においても、コーチングの現場に身を置く指導者は、選手の形態発生をただ拱手傍観する無関心の傍観者であってはならず、そこで行われる運動観察は、佐野（2007, p.57）が指摘するように「単に眺めることでなく、問題に対する炯眼、切迫した強い関心、飽くなき注視を通して動きの問題を見抜き、動きの核心を掴む」という発生運動学の意味における動感論的観察分析（金子, 2005b, pp.134-191）でなければならないといえるだろう。

3. 指導者の転機分析

これまでの論述から、筆者の気づくという現象がどのように生じていたかをフッサル現象学の観点から考察してきたが、気づくという現象の生成過程は説明できても、それがなぜ「転機」と感じ取られたのかについては十分に言及できていない。したがって、以下では、選手Yの動感志向性の変化を筆者が「転機」として把握した論拠について考察する。

1) 転機とは

ここでいう「転機」とは、ドイツの神経生理学者、医学者でもあり、医学的人間学の開祖となったヴァイツゼッカーが、因果関係の原理では説明することのできない生命過程の現象を説明するために用いた概念である。

ヴァイツゼッカー（1975, pp.273-275）によれば、この転機の本質は「主体の危機（Krise）」であり、そこでは「全く嵐のような事象が突発するのに伴って、一定の秩序の流れが多かれ少なかれ唐突に中断され」、「この突発的事象と共に、またそれを通じて、新しい別種の像が成立し、そこで再び出来上る安定した秩序がやはり再び前よりも一層明白で説明のしやすい構造」をもつ、と述べている。また、佐藤（2018, p.157）は、このヴァイツゼッカーの「転機」を「消滅と生成の同時的展開である」と言い、「転機を感じ取って、その前後の変化を比較する区別の仕方は、物理的連続性のなかに何らかの人為的区切りを入れて分類する仕方とは根本的に異なる区別の仕方である」と説明している。

われわれは誰しも、ある運動が突然できるようになったという経験や、あるいは、わが子が初めて独り歩きをしたときのように、ある人の運動発生瞬間を見た経験があるはずである。このような運動発生は、確かに大きな運動発達の節目ではあるが、運動ができたという結果からの判断であり、実施者の動感志向性の転機をとらえたものとはいえない。突然さか上がりができるようになった子どもを見て、「あの子はさか上がりができた」ということは誰にでもわかることだが、それが「次もできる」という確信に裏打ちされた身体知発生によるものなのか、それとも偶然の成功によるものなのかは、運動の結果からだけでは判別できない。ここに、実施者がその運動を<どのように実施しようとしたのか>という受動的地平を含めての動感志向性の転機を見抜くことの意義がある。

今回の事例で、筆者は、選手Yが旋回を6周実施したという結果に基づいて選手Yの動感志向性の転機を把握したわけではなかった。また、旋回の周回数を毎回記録にとり、その回数の変移から判断したわけでもない。選手Yの動感志向性の変化を「転機」として感じ取ったために指導内容を転換するという決断をしたわけだが、そこではどのような事態が生じていたのかを明らかにする必要がある。

2) コツとカンの反転化能力の機能化

筆者は、今回の事例における選手Yの動感志向性の変化を、<膝を伸ばし、足を閉じる>というコツの発生と、<バランスの崩れを察知する>というカンの「反転化能力」（金子, 2007, p.313）の機能化としてとらえた。

われわれ人間の運動は、<手をどう動かすか>や<膝をどう動かすか>という私の動きかたを志向するコツの動感意識と、<どうなっているか>という自らの身体を取りまく状況を志向するカンの動感意識によって成り立ち、それらが絡み合って一つの<動きかた>ができるようになっている（金子, 2020, p.24）。また、佐藤（2017, p.103）は、「意識の向き先によって区別されるコツとカンであるが、両者は同時に作動するのであって、どちら

かだけが絶縁的に機能するのではない。しかし、意識活動の特性から両方同時に意識されることはなく、状況に応じて意識が向かう先は絶えず入れ替わる」と、コツとカンのもつ反転化作用について述べている。

さらに金子（2007, p.313）は、このコツとカンの反転化作用について、「カンが顕在的に機能するときには、コツはその地平に沈み、コツが前面に躍り出るときにはカンはその背景に沈みます。しかし地平に沈んだコツないしカンはいつでもどこでも裏打ちの志向体験が生き生きと息づいているのでなければなりません。そのように自由に反転化できる身体能力が常に生き生きと待機しているものでなければ、とっさのときに反転して同時に機能できるはずありません」と説明し、この反転化は選手の技術力を支える能力でもあり、また、選手の習練目標となったり、選手の動きの習熟度を判断するひとつの指標にもなりうることを指摘している。

このコツとカンの反転化の原理に基づいて今回の事例を考えてみると、4月14日以前の選手Yは旋回中にバランスの崩れを察知すると、膝を曲げたり、足を開いたりすることでバランスの修正を図っていた。これは、＜バランスの崩れ＞という状況を察知するカンが顕在的に機能している背景で、＜膝を曲げたり、足を開いたりする＞という動きかたに志向するコツが潜在的に作動していることを示していると考えられる。このとき、選手Yは旋回中にバランスの崩れを察知した際に＜膝を伸ばし、足を閉じる＞という動きかた（コツ）は、まだ意識することができなかつたと考えられる。しかし、4月14日の実施では＜バランスの崩れを察知する＞というカンが顕在化された際に、選手Yは膝を曲げたり、足を開いたりするのではなく、＜膝を伸ばし、足を閉じる＞という動きかたに修正し、旋回を実施することができた。この場面において、選手Yが＜膝を伸ばし、足を閉じる＞という動きかた（コツ）に意識を注力しなければいけない状態であれば、＜バランスの崩れを察知する＞というカンを顕在化させることは難しくなる。また、同様に、カンを顕在的に機能させている背景で＜膝を伸ばし、足を閉じる＞というコツを潜在的に機能させることができなかったら、＜バランスの崩れを察知しながらも姿勢面を意識したまま旋回を実施する＞という一つの＜動きかた＞は発生しなかつたと考えられる。つまり、「周界状況に投射するカンの実現はコツに支えられ、自我身体に中心化していくコツがカンを支えているのでなければ、そのカンは空虚な単なる予測でしかない」（金子, 2007, p.313）ことになり、このときの＜バランスの崩れを察知する＞というカンの実現を支えていたコツは、それまでの＜膝を曲げたり、足を開いたりする＞という動きかたではなく、＜膝を伸ばし、足を閉じる＞という新たな動きかたであったことが考えられる。

以上のことから、4月14日の選手Yの旋回は、それ以前の選手Yに潜在的に機能していたコツとは別種のコツが

発生していたと考えられ、またそのコツは、意識の大半を向けなければ実施できない状態のではなく、＜バランスの崩れを察知する＞というカンが顕在的に働いている状況であっても、状況に応じて入れ替えることのできる「反転化能力」が機能していたと考えられる。このようなコツの発生と反転化能力の機能化を、筆者は「転機」として感じ取ったということになる。

3) 転機を把握する土台としての潜勢自己運動と移入的運動分析法

最後に、筆者にとって、選手Yの動感志向性の転機を把握するための土台となっていた「潜勢自己運動（virtuelle Selbstbewegung）」（金子, 1987, p.123）と「移入的運動分析法」（佐野, 2006a, p.81）について検討する。

選手の＜動く感じ＞という動感志向性は、物的に測定することもできなければ、外部視点から見ることでもできない。そのため、選手の動感志向性を観察者（指導者）がとらえようとする場合、そこにはマイネル（1981, pp.175-176）の他者観察における「運動共感」が求められることはいままでのない。この運動共感は、「相手の運動を観察しながらその志向性は潜勢的に相手の動感世界を捉え、そこに自らの動感経験が共振する」（金子・山口, 2020, p.171）ことで生じる。そして、この運動共感を通して展開される潜勢自己運動では、観察対象となっている運動経過は観察者自身の自己運動として潜勢的に頭の中で遂行され、そこでは自分が現実とその運動をやっている時と同じ視野が展開され、どこでどんな力を入れ、どのような空間・時間分節で運動を遂行しているのかが体験される。そのため、指導者には、自らが遂行している潜勢自己運動を内省的に分析する能力が求められる（佐野, 2006b, p.82）。

今回、筆者が思わず「あっ」と声を出して選手Yの動感志向性の変化に気づいたのは、先ほど言及した＜予期外れ＞だけでなく、選手Yの旋回を観察しながらも筆者自身が旋回を遂行しているかのように潜勢的に行い、その動感志向性をわが身にありありと感じ取っていたためと考えられる。ヴァイツゼッカー（1995, pp.127-128）はこのような観察態度を「移入（transjizieren）」と呼び、生命あるものの世界を理解するためには、「生きものの中へ身を移す必要がある。それを対象化（客観化）したり、超越したりするのは不十分なのである。私は私自身をその中へ置き移さなければならない」と述べている。「移入」といっても、観察者である指導者が他者である選手に物理的に移入するわけではない。しかし、このような移入的態度によって選手の身体に移入して、選手の運動を内から知覚し、動感志向性をとらえることは、コーチング実践において不可欠である。金子（2000）がマイネルの運動モルフォロジーにおける他者観察法の「印象分析」を、「移入的運動分析法」と呼んだのも、この意味においてであろう。

Ⅵ. まとめ

本研究では、コーチング活動において重要な指導者の転機分析の内実を明らかにするために、筆者の過去の指導事例を取り上げ、転機分析に関する過程を現象学的立場、とりわけフッサー現象学ならびに金子の発生運動学の観点から考察してきた。

本論における考察の結果、筆者の転機分析は、まず選手の質的变化に「気づく」ということが前提になっており、その気づくという現象の内実、フッサー現象学の内的時間意識における「予期外れ」によって生じていることが示唆された。

続いて、気づくという現象は、現象学における「触発」の働きかけによるものであり、その触発に対応する要因として観察者（指導者）の「動機づけられた関心」が重要な役割を担っていることが示唆された。さらに、選手の動感志向性の転機を的確に把握するためには、指導者は選手の動感発生ないし動感志向性そのものに関心を示しながら運動観察を行なうことが必要であり、その意味においても指導者の転機分析力は金子の発生運動学における動感論的観察分析が前提となっているといえよう。

最後に、筆者が選手の動感志向性の変化を「転機」と判断した論拠に関する考察が進められ、選手の「コツの発生」と「反転化能力の機能化」を筆者は転機発生と判断していたことが明らかとなった。また、筆者の転機分析の土台としては、金子の主張する「潜勢自己運動」と、ヴァイツェッカーの意味する「移入的態度」における運動観察が重要であったことが示された。

選手の動感志向性の転機を感じ取る転機分析は、選手へのコーチング活動を展開するうえで重要な判断基準となっている。しかしながら冒頭で述べたように、その実践知の内実はいまだ十分に明らかにされていない現状にあった。今回、筆者個人の一事例ではあるが、フッサー現象学ならびに金子の発生運動学の観点から考察してきた本研究は、指導者の転機分析力の解明に向けて、あるいは、選手へのコーチング方法論を考えるうえで有用な素材になるといえるだろう。本研究の成果が、指導者の専門的指導力の解明ならびに養成方法論の構築の一助となり、実践現場に役立つコーチング研究の新たな知見となることを願い、論を閉じることにする。

注

注1) 金子 (2002, p.39; 2005a, p.304) は、現象学の創始者フッサーの後期思想の鍵概念としての「キネステーゼ」(Kinästhesie) に「動感」という訳語を充て、われわれ人間の運動の「動く感じ」を研究する発生論的運動分析(発生運動学)のもっとも重要な基本概念として位置づけた。そして、この「動感」という用語に、「意識はすべて『何

ものかについての意識』Bewußtsein von etwasであるという意識の基本的性格」(木田, 2000, p.31) の「志向性」という現象学用語を組合せ、端的に「動感志向性」と呼び、発生運動学における基本語として用いている。また、現象学における「志向性」は、意識や意図を伴わず、気づかずに自然に受け止められるように生じている「受動的志向性」と、しっかり意識して、能動的に働きかけるようにして生じている「能動的志向性」に区別される(山口, 2009, p.66)。

すなわち、「動感志向性」とは、「われわれによって発動されたわれわれの運動である運動の意識」(ラントグレーベ, 1980, p.188)、あるいは「<感覚しつつあること>が今ここに現在化されて、<動きつつあること>と一体化しているという運動の意識」(金子, 2005a, p.308) を意味し、運動者の「～のように動かそうとする」というはっきりとした意図や意識を伴う能動的志向性としての「動感志向性」だけではなく、運動者の意図や意識を伴わず「(無意識的に)～のようになっている、～のように動いている」という受動的志向性としての「動感志向性」までも含むものである。

注2) エピソード記述とは、主に保育や看護、教育の分野で用いられる事例研究方法の一つであり、「何も感じない(感じてはならない)透明な観察者の目にあくまで対象としてとらえられるもの、測定可能で再現可能なものだけを議論しようという『客観主義=実証主義の立場』」(鯨岡, 2006, p.21) からの行動科学的観察ではなく、「まさにその場に関与しつつ、そこにおいて生起する事象が我が目と我が身体を潜り抜けるところをとらえ、記述する」(鯨岡, 2006, p.18) という「関与観察」を通しての記述方法である。そこでは、関与観察者の興味、関心、知識、経験、理論等々の背景の上に、ある場面がエピソードとして浮かび上がってくることから、エピソードそのものの意味に加えて、なぜそのエピソードを取り上げるのかを議論することが観察者の暗黙の理論を明らかにすることにつながる(鯨岡, 2006, p.88)。

注3) 円馬は男子体操競技の鞍馬の練習器具として考案され、現在ではジュニア期の選手の指導に広く普及し、鞍馬の旋回の初期指導に用いられている(日本体操協会男子体操競技委員会, 2001, p.53以下)。円馬を用いた旋回指導によってジュニア期の選手でも質の高い旋回を習得することが可能であり(中村・周東, 2002, p.24)、質の高い旋回は鞍馬の準備段階として重要になることから、円馬は男子ジュニア選手の競技種目の一つとして位置づけられている。

注4) 金子 (2005a, p.83) は、キネシオロジーやパイ

オメカニクスなどの機械論的視座の立場に立つ精密科学的な身体運動学に対峙して、人間の身体運動の発生、つまり、運動ができるようになることを目的とした目的論的視座の立場に立つ目的論的身体運動学を提唱した。このように、人間の身体発生という出来事を目的とした発生目的論の立場に立つ運動研究、すなわち、＜発生論的身体運動学＞を簡略化して＜発生運動学＞と言い換え、運動指導の実践的運動分析論としての学問に位置づけた。

文 献

- 會田宏（2018）コツやカンを対象とした実践研究。福永哲夫ほか編著、体育・スポーツ分野における実践研究の考え方と論文の書き方。市村出版：41-52。
- フッサー：山口一郎・田村京子訳（1997）受動的総合の分析。国文社。
- フッサー：浜渦辰二訳（2001）デカルト的省察。岩波文庫。
- フッサー：谷徹訳（2016）内的時間意識の現象学。ちくま学芸文庫。
- 金子明友（1971）体操競技教本Ⅲ－鞍馬編－。不昧堂出版。
- 金子明友（1974）体操競技のコーチング。大修館書店。
- 金子明友（1976）体操競技 世界の技術。講談社。
- 金子明友（1987）運動観察のモルフォロジー。筑波大学体育科学系紀要、10：113-124。
- Kaneko, A.（2000）Ästhesiologische Bewegungsanalytik des Sports。スポーツモルフォロジー研究、6：114-167。
- 金子明友（2002）わぎの伝承。明和出版。
- 金子明友（2005a）身体知の形成（上）。明和出版。
- 金子明友（2005b）身体知の形成（下）。明和出版。
- 金子明友（2007）身体知の構造。明和出版。
- 金子明友（2010）身体運動の人間的なもの。スポーツ運動学研究、23：1-14。
- 金子一秀（2020）コツとカンとは身体でわかる。日本スポーツ運動学会編、コツとカンの運動学。大修館書店：24。
- 金子一秀・山口一郎編（2020）〈わぎの狂い〉を超えて。明和出版。
- 河本英夫・稲垣論編（2017）現象学のパースペクティブ。晃洋書房。
- 木田元・野家啓一・村田純一・鷺田清一編（1994）現象学事典。弘文堂。
- 木田元（2000）現象学。岩波新書。
- 小林隆児・西研編（2015）人間科学におけるエヴィデンスとは何か。新曜社。
- 鯨岡峻（2000）関係発達論の構築。ミネルヴァ書房。
- 鯨岡峻（2006）エピソード記述入門。東京大学出版会。
- L. ラントグレーベ：山崎ほか訳（1980）現象学の道－根源的経験の問題－。思想史ライブラリー 木鐸社。
- マイネル：金子明友訳（1981）スポーツ運動学。大修館書店。
- マイケル・ポランニー：高橋勇夫訳（2017）暗黙知の次元。ちくま学芸文庫。
- 水島宏一（1998）鞍馬における両足旋回の技術について。日本体操競技研究会誌、6：39-55。
- 村木征人（2007）相補性統合スポーツトレーニング論序説：スポーツ方法学における本質問題の探究に向けて。スポーツ方法学研究、21：1-15。
- 中村剛（1997）あん馬運動における両足旋回の技術改善の可能性。スポーツ運動学研究、10：55-66。
- 中村剛・周東和好（2002）鞍馬両脚旋回初期指導におけるつまずきに関する運動学的事例研究。体操競技・器械運動研究、10：23-31。
- 日本体操協会男子体操競技委員会（2001）男子ジュニア選手のためのトレーニング・マニュアル－種目編－。（財）日本体操協会。
- 太田昌秀（1972a）あん馬運動における技術（その1。技術発達史的考察）。研究部報、29、（財）日本体操協会：44-54。
- 太田昌秀（1972b）あん馬運動における技術（その2。上向き転向移動の技術）。研究部報、30、（財）日本体操協会：47-57。
- 佐野淳（2006a）移入的運動分析法。日本体育学会監修、最新スポーツ科学事典。平凡社：81。
- 佐野淳（2006b）潜勢自己運動。日本体育学会監修、最新スポーツ科学事典。平凡社：82。
- 佐野淳（2007）ゲーテ形態学とスポーツ運動学的運動分析。モルフォロギア、29：45-62。
- 佐藤徹（2014）運動発達査定における動感志向分析の意義。体育学研究、59：67-82。
- 佐藤徹（2017）技術トレーニング。日本コーチング学会編、コーチング学の招待。大修館書店：98-109。
- 佐藤徹（2018）現象学的スポーツ運動観察論。大学教育出版。
- 新竹優子・渡辺良夫（2018）動感意味核の再構成に関する発生運動学的研究－段違い平行棒における前方2回宙返り下りの修正指導事例－。スポーツ運動学研究、31：1-16。
- 谷徹（2018）これが現象学だ。講談社現代新書。
- ヴァイツゼッカー：木村敏訳（1975）ゲシュタルトクライス。みすず書房。
- ヴァイツゼッカー：木村敏訳（1995）生命と主体。人文書院。
- 鷺田清一（1997）現象学の視線。講談社学術文庫。
- 渡辺伸（1991）床運動の後転とびにおける障碍の形態の事例研究。スポーツ運動学研究、4：77-88。
- 山口一郎（2004）文化を生きる身体。知泉書館。

- 山口一郎（2009）実存と現象学の哲学，放送大学教材。
山口一郎（2012）現象学ことはじめ（改訂版），日本評論社。
吉田茂・栗原英昭・山崎路雄（2008）鞍馬における「旋回」の始原論的構造分析．体操競技・器械運動研究，16：29-37。
関子浩二（2017）体育方法学およびコーチング学研究が
目指す研究のすがた．コーチング学研究，30，増刊号：129-135

〔令和3年4月9日 受付〕
〔令和3年9月8日 受理〕